

## ある日 突然

大阪狭山市立狭山中学校 三年

生野 巧

小さい頃の夢は警察官だった。運動は昔から得意で、運動会では毎年リレー選手だった。中学から陸上部に入って、一年生で駅伝の選手になった時は嬉しかった。剣道も習っていた。稽古は厳しかったけれど、おかげで初段審査も順調に合格したから二年生で二段取得を目指していた。一ヶ月後に運動会を控えた九月の夕方。僕の心臓は止まった。本当に突然だった。剣道の稽古は大会前の調整稽古で、ちよつと気持ち落ち着かせた瞬間、急に身体が熱くなつて、目の前は真っ暗になった。

その後の記憶は全くない。ただ、真っ暗な世界。お花畑もなかったし、川の向こうでひいばあちゃんが手招きすることもなかった。次の記憶は救急車の中。何度も呼びかける救急隊員の人、泣きながら名前を呼ぶお母さん。

当初、熱中症で倒れたと思われていた。でも、眼球が上転し、色黒の肌が紙のように真っ白になった時、剣道の先生は異常に気づき、すぐにAEDと救急車の手配をしてくれ

身体障害者手帳を所持することになった。

僕は勉強が苦手だ。成績は中の下ぐらい。真面目に勉強しているけど、成績はふるわない。だけど運動という強みがあった。陸上は好きだったし、運動は得意だったから消防士とか、剣道が続けていけば警察官になれるかも…なんて思ったりしていた。でも、もう無理だ。だって、僕の心臓はいつ止まるかわからない。そんな危ない心臓では警察官になれない。消防士の厳しい訓練はできない。僕は何もかも無くした。目の前に存在した幾つもの道が消えた気がした。僕に価値は？息が苦しい。真っ暗な世界に一人きり。涙が溢れた。

そんな時、「子どもは親より先に死んでは絶対ダメなの。」とお母さんが抱きしめてくれた。「生きてりゃあ、なんとかなる。」とおじいちゃんが言った。「あなたが居てくれるだけで、それだけで嬉しい。」とおばあちゃんが言った。「こうして、家族と一緒に食事できることが一番幸せだ。」と、父さんが言った。「世の中色々な道がある。おまえに合う道は必ずある。」と、剣道の先生が言った。僕は一人じゃない。幾つもの温かい手が僕を抱きしめてくれた。前とは違う温かい涙が溢れた。

この先僕は、容赦ない現実を見るかもしれない。理不尽な壁を感じて自暴自棄になるかもしれない。人の目を気にして下を向くかもしれない。だけど僕は、命を救ってくれ

た。学校には先生が残っていて、呼びかけにすぐに、AEDを取って走ってきてくれた。心臓が停止してから二十分が生死の分かれ目らしい。平日で学校が開いていた。夜八時だけ先生が残っていた。すぐにAEDを使ってもらえた。僕はいくつもの幸運のもと五分ほどで心肺蘇生をしてもらった。

最先端医療技術を誇る病院で、僕の心臓を止めた原因は突き止められるはずだった。何度も全身麻酔をした。何度も造影剤を入れた。心筋を採取した。冠動脈も調べた。家族みんなの遺伝子も調べた。だけどどんな検査をしても僕の心臓に異常はなかったんだ。

『特発性心室細動』これが僕の診断名だ。心臓が突然止まったけど、原因が分からないから、いつまた止まるかわからない。という状態だ。「埋め込み式の除細動器」を体内に入れることになった。この石鹼大の機械は、一生外れることはない。それは、心臓機能障害一級に値し、僕は一生、

た多くの人に対して恥ずかしい人間にはなりたくない。剣道の先生、学校の先生、消防隊員の人、病院の先生、看護師さん、リハビリの先生、たくさんの方が僕の蘇生を喜んでくれた。家族が、親戚が、友達が、「生きていてくれて嬉しい。」って言うてくれた。

これまでの入院生活の中で、いつも笑顔で接してくれた看護師さんや検査技師さん、リハビリの先生の仕事に興味を抱くようになった。今度は僕も、人を助けられる人間になりたいと思っている。

## 「知らない」が生む壁

裾野市立富岡中学校三年  
おお 太田 結月  
おお 結月

ある朝のテレビで、障害者の生活と意思が綴られている本が紹介されていてとても気になり、すぐにネット注文をした。読んでみると、今までにない衝撃を受けた。すべてを読解するには、今の私では歯が立たなかつたが、作者から私たちへ、強く訴えかけるものがあると感じた。

八月の四日間、障害者支援施設へボランティアとして行かせていただいた。この施設では、幅広い年代の知的障害や発達障害を抱えている方々が働き、通っている方もいれば、ここで生活している方もいる。この四日間で、たくさん洗濯されたタオルをみんなで畳む作業や、ダンボールを組み立てて固定する作業をしたり、この施設の伝統の、舞台の練習に参加したり、たくさんの体験をした。

今回の体験で、会話の難しさをとても感じた。お話をするとき、一方通行になってしまふことが多く、自分の意思が伝えられないこと、相手の意思を受け止められないことにとっても苦悩した。しかし、それは私だけが感じているこ

とではなく、きつと相手の方も感じていることだ。これまでの私の、思いを伝えられるというあたり前は、障害を抱えている方からしたら難しい。そのため、思いをわかっても伝えられないもどかしさを日頃感じることがあるのではないかと、不確かながら思い至つた。自分のあたり前を基準に思い込んだことで、視野が狭くなつていた。他のあたり前や考え方をすることで、自分の考えの視野が広がることを実感した。

タオルを畳む作業をしていたとき、コブになつているタオルがあり、私はそのタオルと闘つていた。そのとき、隣で作業していた方がそれにすぐに気づき、コブを取つてくれた。また、立つて作業をしていたときに後ろの方が声をかけてくれて、自分が立つてまで椅子を差し出してくれた。私を気にかけてくれていた方が、すぐに気づいてくれて躊躇無く行動してくれたことが、とても心を温めてくれた。また、職員さんは施設の方々に向けて何かを話すとき、い

つもゆつくり大きな声で簡潔に話していた。そのため、舞台の練習に参加したとき、施設の方々には職員さんの説明を一回で理解していた。きつと、どうやって話せばわかりやすく伝わるか考えて、スピードや声のボリュームを工夫しているのだと思う。これまで私は、会話が難しいことを、思いが通じ合えないことだと自分の中で誇張していて、知らないことは傲慢につながるのだと感じた。障害を抱えている方は、長く難しい会話では、思いを伝え合うのは難しい。しかし、伝え方や受け取り方を相手に合わせることで思いは伝わり、心は繋がりやすくなるのだと教えてくれた。

人と人との壁。特に障害を抱えている方とは、壁が分厚く感じていた。しかし、壁はもともとあつたのではなく、私が壁を作つてしまつていたので。この四日間、たくさんの方が私に自分の言葉で一生懸命に話をしてくれたり、以前特別支援学校へ行ったときも、とても爽やかな挨拶をしてくれたり、親しみ合おうとしてくれた。

共生社会をつくるためには、相手のことを知る必要がある。相手のことを知らないで、自分の価値観や気持ちを押しつけることは、それに反している。互いがわかり合うために、相手のことを知ろうとする歩みが、自他の未来を明るくし、共生社会に繋がる一歩になると、今回の体験が教えてくれた。

の方も含めて、全員があたり前の普通の生活ができる社会にしようという意味があり、共生社会をつくるための一つの目標のようなものだと思う。はじめに紹介した本の作者が、本を読むことはあたり前ではないと強く伝えてくれた。その投げかけに伝えることも、ノーマライゼーションだ。今の私にはまだ応えられない。だから、まずは知ること、考えることから始めてみよう。

## 「吃音と本当の自分」

出水市立鶴荘学園 九年  
上垣陽人

「吃音」とは、音を繰り返したり、伸ばしたり、つまったり症状は、人それぞれです。僕は、八歳のときに、吃音を発症しました。今までどおりに、言葉をうまく出すことができずなかなか、周りの人に理解されにくいので、説明しても、信じてくれなかつたり、「もつとスラスラ話してね」と言われたりしました。友だちに、悪気がなかつたことは、十分にわかっていました。でも、話せなくて迷惑になっているのではないかという思いがありました。日に日に、先生や友だちは、理解してくれたのですが、初めて会った人などと話すときは、正直嫌になることがありました。そんなとき、母が紹介してくれたのが「言葉の教室」というものでした。当時の自分にとつて、正直な気持ちをだせる唯一の場所でした。自分が言い終えるまで、待つてくれる先生がいて、自分の吃音について詳しく一から十まで、教えてくれる。心の助けになつてくれていた場所でした。先生が教えてくれたことは、吃音を恥ずかしがらないでいいこと。悩んでい

るのは僕一人ではないこと。いままで僕が悩んでいたことを、一つ一つ丁寧に解決してくれました。そして、一年に何人かの同じ障害をもっている大人や子供と一緒に話を聞いたり、遊んだりする日がありました。さらに、吃音をもちながら、先生や、話すのが絶対必要な仕事についている人もいました。来た人たちは、たくさんの体験談を語ってくださいました。先生をしている人は、教員採用試験のときに、思い切つて、「自分には、吃音があります。」と打ち明けたそうです。「打ち明けたことで相手も、理解してくれて、楽に話すことができました。」とおっしゃっていました。僕は、今まで、人に吃音という説明は理解している先生がいないと、うまく説明することができませんでした。でも、まだその勇気がありませんでした。

人と話す職業をしている人は、「自分が、吃音ということを理解してくれたお客さんは、話をよく聞こうとしてくれるので、こつちも話しやすい」と笑つて話してくれました。

者を差別しない社会を作つていきたいです。

自分の障害を、笑い飛ばせる姿は、素敵だなと思いました。来てくださった先生や大人は、自分なりの工夫をして、障害と向き合い、克服しているように見えました。自分は、まだ障害と向き合うことはできないので、一日一日、一歩ずつ向き合おうと思いました。

言葉の教室も終わり、中学生になりました。僕は、まだ発表することに自信がなく、あまり挙手も自分からすることがあまりありませんでした。中学校では、ソフトテニス部に入りたかつたので、ソフトテニス部に入りました。やはり、運動系の部活なので、声出しが一番下の僕達の仕事です。声出しをしたのですが、言葉がつまつて、あまりすることができませんでした。でも、初めて大会をみたときに、先輩達が大きな声で、喜んでいるのを見て、先輩達のようになりたいと思いました。そして、僕は自分が声を出しやすいうように、大きく息を吸つてみたり言い換えたりして、工夫をしました。そうすると、うまく声を出すことができました。やつと部員になつたという気がしました。

自分が言いやすい言葉を見つけると、自然と自信がつき、スラスラと言える言葉も多くなりました。一歩ずつ障害と向き合うことができます。

僕はいつか、「吃音が僕にはありません」と、人前で笑顔で、言えるようになりたいです。そして、人々に吃音という障害を、知ってもらえるように努力したいです。そして、障害

## 障がいを持っていない私が思うこと

山口大学教育学部附属山口中学校 三年

川谷麻絢

「うるさい！変な足して行くせに！」これは私が四歳の頃、兄と喧嘩した際に言ってしまった言葉。その時初めて普段あまり怒ることのないお父さんから厳しく叱られたことを今でもよく覚えている。

私の兄は、先天性四肢障害を持っていて、生まれつき左足の指は無く、とても小さな足である。そのため、普段は義足をつけて生活をしている。義足は靴のように履くタイプで、その上から靴下を履いていけば、見た目で義足だと気付かれることはほとんどない。だからこそ、足の障がいはなかなか理解され難い。例えば、体育の授業。足が不自由なため、やはり運動においては兄は他の生徒より苦手であった。しかし、兄は足の障がいを理由にせずにどんな競技でも授業に参加していた。持久走体会の日、帰ってきた兄の左足の裏には、五百円玉よりも大きいマメができていた。しかし、体育の先生から良い評価を貰うことはなく、もつとがんばれと言われていた。技能面では劣ることはあつて

労してきたことはあるのだろうと思つた。

人間が一人ひとり違うように、障がいにも様々なものがある。同じ障がいでも、症状に個人差がある。現在日本の人口の約八パーセントの人は障がいを抱えているそうだ。障がいとは決して他人事ではなく、身近にあるものなのだと思う。近年SNSの普及やテレビ番組での障がいについての放送で、障がいについて知る機会もあり、差別的な態度をとる人も少ないと思う。しかし、障がいについて、本当に皆が理解できていると言えるだろうか。軽い障がいであっても、人の助けが必要な場合もある。また、重い障がいであっても、自分で出来るものややらなければいけないものもある。人の助けがいる場合はそれぞれなのだ。それは障がいを持っていない人も同じだと思う。私は、障がいに対する理解を全員が深め、健常者と障がい者の壁を少しでもなくしていきたい。その為にも今一度障がいについて各々が考えるべきだと思う。「障がいは個性」と言われることがあるが、私はそれに違和感を覚える。個性だと唱えるのは健常者の方が多い。障がいによる苦勞や生きづらさを「個性」というプラスな表現で美化して片付けるべきではないと思うのだ。障がいを個性だと言う人の見解もよく分かるし、それが間違つた考えだとも思わない。だからこれは私個人の考えである。一人一人障がいに対する考え方は違うと思う。そのため、自分が考えたその考えを、想いを大切にして

も、努力していることを少しでも認めてはもらえないのか、と思つた。また、兄が小学生の頃、修学旅行で足を初めてクラスメイトに見られた時、笑いながら「気持ち悪い」と心無い言葉をかけられたことがあつたそうだ。その時は、冗談として流したそうだが、実際兄は不快な思いをしたに違いない。しかし、そんな言葉を放つたクラスメイトは何とも思っていないのだろう。それがあつてか、兄は自分の足を見せるのは心を開いた友達の前だけで、義足を外すのを嫌がるようになった。

兄は自分の足の障がいについて自分から話すことはない。だから私は気にもしていないのかなと思つていた。だけど母から聞いた。

「お兄ちゃんね、小さい頃、周りより小さな自分の足を気にして、毎日おまじないをかけていたの。『大きくなれ、大きくなれ、』って。『これを聞いて私は驚いた。今、兄はどう思っているのかは分からない。だけど少なからず今まで苦

ほしい。障がいを持っていない人も持つていない人も全員が過ごしやすい世界になるように。」

## しゅんちゃんはしゅんちゃん

近江兄弟社中学校 一年  
 澤居 空

僕は、まだ、障害者との出会いはないと思っていた。お母さんにそのことを言うと

「会ったことないんだ！空はその人のことをその人としか思わないから、障害者だと思わないんだね。すごいね。」

とビックリした様子で言った。僕は、障害者というものがどのようなものかよくわからなかった。障害者についてお母さんと話していると、僕が気付かないうちに、障害者に会っていることに気付いた。実はお母さんの友達の子供の男の子がダウン症という障害らしい。その子とは時々家に行く時に遊ぶ。しゅんちゃんは小学一年生だが、そんなにしゃべれない。しつかりとはしゃべることができないから、何を言っているのか僕には分からない。しゅんちゃんには、楽しそうに笑いながら、僕の両手を握って、左右に揺らし始めた。そして、両手を握ったまま、ぐるっと回った。僕は、(なべなべそこぬけがしたいんだろうな) と思いい、僕もぐるっと回った。しゅんちゃんは小さくて回りにくい。

僕は、両手を離さないようにしゃがみながら回った。しゅんちゃんは、声を出しながら笑った。しゅんちゃんも楽しそうだったし、僕も楽しかった。しゅんちゃんはずっと笑っていて可愛かった。

僕はダウン症について疑問に思っ調べてみた。しかし、染色体や、21番目など、難しい言葉が並んでいて僕には理解できなかった。よく分からないが、障害者らしい、じゃあ、そもそも障害って何だろう。『障害』について辞書で調べてみると、『何かをするのにじやまになるもの』と出てきた。しゅんちゃんにとって何がしくて、何がじやまなのか考える。しゅんちゃんは、楽しく遊びたいんじゃないかな、じやまになるもの…。思いつかない。しゃべれないことがじやまなものなんだろうか。しゃべれなくても、僕はしゅんちゃんがなべなべそこぬけをやりたがっていることが分かった。それなら、しゃべれないことはしゅんちゃんにとって、じやまなものとは言えないのではないか。

目の悪い人がメガネを掛けて障害者では無くなるのと同じで、どんな治らない病気を持っている人でも、メガネのような道具があれば、障害者にはならない。障害を持っている全てのの人にとって、そんな道具や環境があればいいなと思う。

障害やダウン症について調べた今でも、僕はしゅんちゃんのことを障害者だとは思わない。しゅんちゃんやしゅんちゃん、可愛い男の子だと思う。